

# 金 融 市 場 動 向

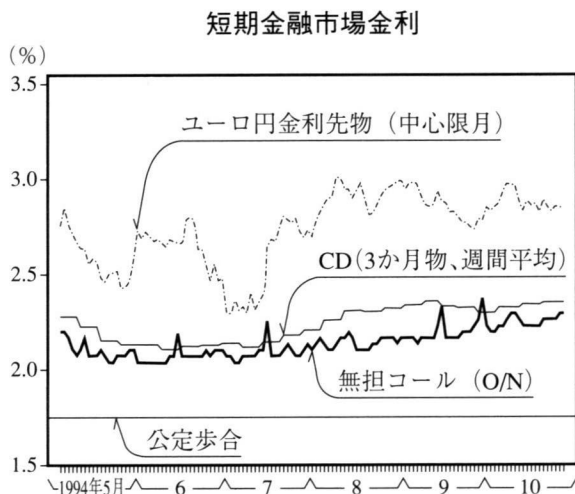
— 平成6年10月 —

(平成6年11月15日)

## 1. 短期金融市場

10月中の無担コール・オーバーナイト物レートは、幾分上昇した。CD（譲渡性預金）3か月物は、上旬にレートが強含んだ後、出合い難が続いた。一方、ユーロ円金利先物（3か月物、金利ベース）は、上旬に上昇したものの、中旬から月末にかけて再び軟化した。

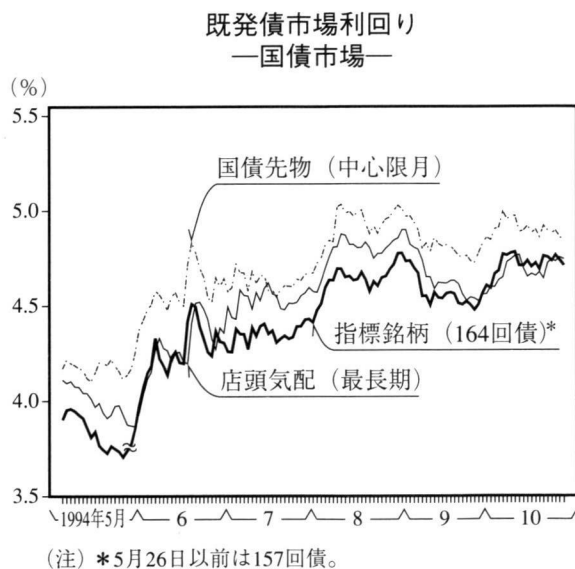
コール・プロパー手形市場資金平均残高（全国）は39兆9,939億円と前月（38兆8,943億円）比増加した。



## 2. 資本市場

10月の長期国債利回り（164回債）は、景況感の好転を背景に前半に上昇した後、概ね横這いで推移し、結局4.710%で越月した（前月末4.560%、国債先物中心限月利回りは

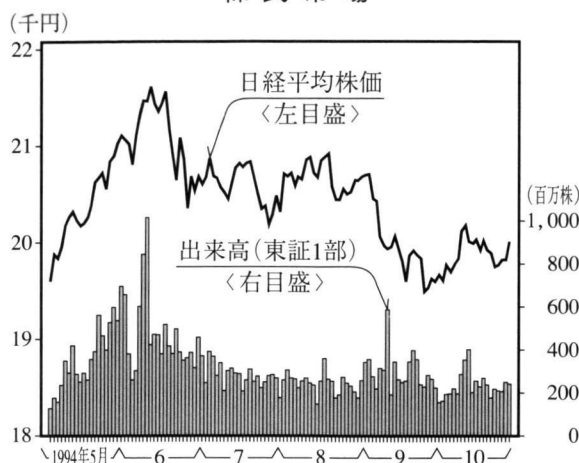
4.827%＜前月末4.812%＞で越月）。国債の出来高は、現物（店頭取引）、先物ともに前月を下回った。



株式市況（日経平均株価）は、引き続き値動きに乏しく、19,989円で越月した（前月末19,563円）。また、株式出来高（東証1部月中1営業日平均）は2.35億株（速報）と前月（3.02億株）を下回り、本年入り後最低の出来高となった。

起債動向をみると、長期国債10年物（価格競争入札分）については、クーポンレートが前月債比0.2%引き上げの4.7%（新発債としては1年3か月ぶりの水準）となった中、概ね順調な入札となった（10月25日入札分＜11

## 株式市場



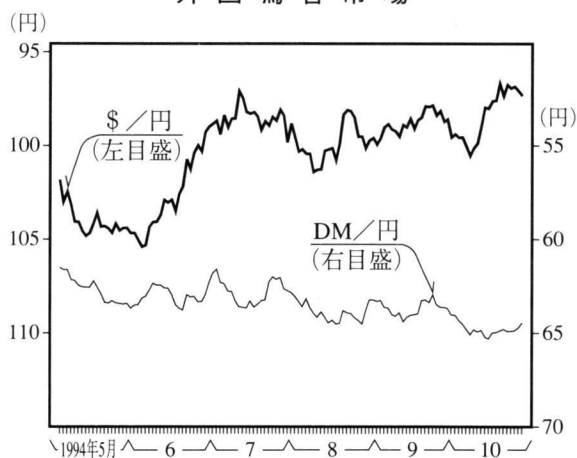
月債>は募入平均利回り4.676%、応募倍率2.57倍)。一方、中期国債は、4年物については盛り上がりを欠いた入札となった（10月4日入札分は募入平均利回り3.854%、応募倍率2.48倍）ほか、2年物についても低調な入札となった（10月12日入札分は募入平均利回り2.690%、応募倍率1.23倍）。短期国債については、短期金利先高観を背景に投資家の購入意欲が低かったことなどから、総じてみればやや低調な入札となった（10月5日入札分<6か月物>は募入平均利回り2.396%、応募倍率1.89倍）。

10月の国内公募普通社債は、期明け後の長期金利低下を見込んでいた発行体が長期金利の強含みを眺めて発行を見送ったことから、300億円と本年1月（起債ゼロ）以来の極めて低調な発行となった（9月2,100億円）。一方、国内エクイティ市場での発行（10月払込み分、増資を除く）は、好業績の中堅・中小企業の発行堅調や一部大企業の大型起債を受け、引き続き高水準の発行となった（9月4,360億円→10月4,300億円）。

## 3. 外国為替市場

10月の円の対米ドル直物相場（東京市場、終値）をみると、上旬には、日米包括経済協議の部分合意に加え米政策金利引き上げ観測の台頭もあって、いったん100円台後半まで下落したが、その後は独総選挙での連立与党勝利を背景とした独マルクの対米ドル相場上昇をきっかけに再び上昇に転じ、21日には96.68円（東京市場、終値）と既往最高値を更新した。もっとも、月末にかけてはやや反落し、結局97.37円で越月した（前月末98.59円）。

## 外国為替市場



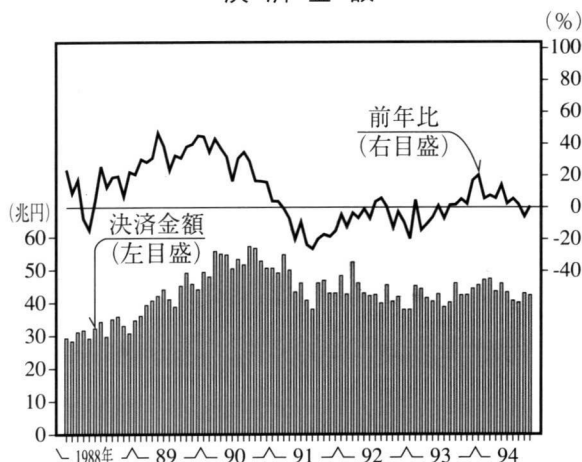
円の対独マルク直物相場（東京市場、終値）は、上旬は下落したものの、その後は65円を挟んで概ね横這いで推移し、結局64.45円で越月した（前月末63.68円）。

なお、東京外国為替市場の出来高（円対米ドル、直物および先物・スワップ計、1営業日平均）は136.6億ドルと、前月（123.2億ドル）を上回った。

#### 4. 決 済

10月の資金決済の金額（1営業日平均）をみると、手形交換高（東京）は前年同月を下回った（前年比△15.8%）一方、全銀システム取扱高は前年同月を上回った（前年比+2.2%）。この間、外為円決済交換高は前年同月を上回った（前年比+6.8%）。また、国債の決済金額（1営業日平均）については移転登録、振込口座振替ともに前年同月を下回った（移転登録：前年比△2.1%、振込口座振替：前年比△21.7%）。

決 済 金 額



- (注) 1. 1営業日平均。  
2. 手形交換高（東京）、全銀システム取扱高、外為円決済交換高の合計額。

#### 5. 資金需給、金融調節

10月の資金需給をみると、銀行券要因が1,353億円の余剰（前年同月6,905億円の不足）となった一方、財政等要因は国債発行超から1,697億円の不足（同1,093億円の不足）となった。こうしたことから、全体では344億円の不足（同7,998億円の不足）となった。

こうした状況下、日本銀行は手形買入等により資金を供給した。

11月の資金需給（国債発行織り込み前）を窺うと、銀行券要因については、月中3,000億円程度の不足（前年同月298億円の不足）となる見通しである一方、財政等要因は、源泉所得税を中心とする税揚げや厚生保険料の受け入れが見込まれるものの、地方交付税交付金や国債償還等の支払いが嵩むこと<sup>かさ</sup>から、4兆5,900億円程度の余剰（同4兆9,376億円の余剰）となる見通しであり、この結果、全体では4兆2,900億円程度の資金余剰（同4兆9,078億円の余剰）となるものと予想される。

#### 6. マネーサプライ、銀行券、預金・貸出

9月のM<sub>2</sub>+CD平残前年比伸び率は+2.3%（速報）と前月に比べ0.4%ポイント上昇した。通貨種類別にみると、現金通貨、準通貨の伸び率が上昇した。また、広義流動性の平残前年比伸び率は+3.5%（速報）と、前月に比べ0.1%ポイント低下した。

10月の銀行券平残前年比は+5.4%と、前月（+7.2%）を下回った。

10月中の金融機関の預金・貸出動向をみると、預金平残（実質預金+CD、都銀、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は+2.0%と前月比若干伸び率が低下した。また、総貸出平残（都銀、長信、信託、地銀、地銀Ⅱ）の前年比は△0.2%と5か月連続の前年割れとなった。

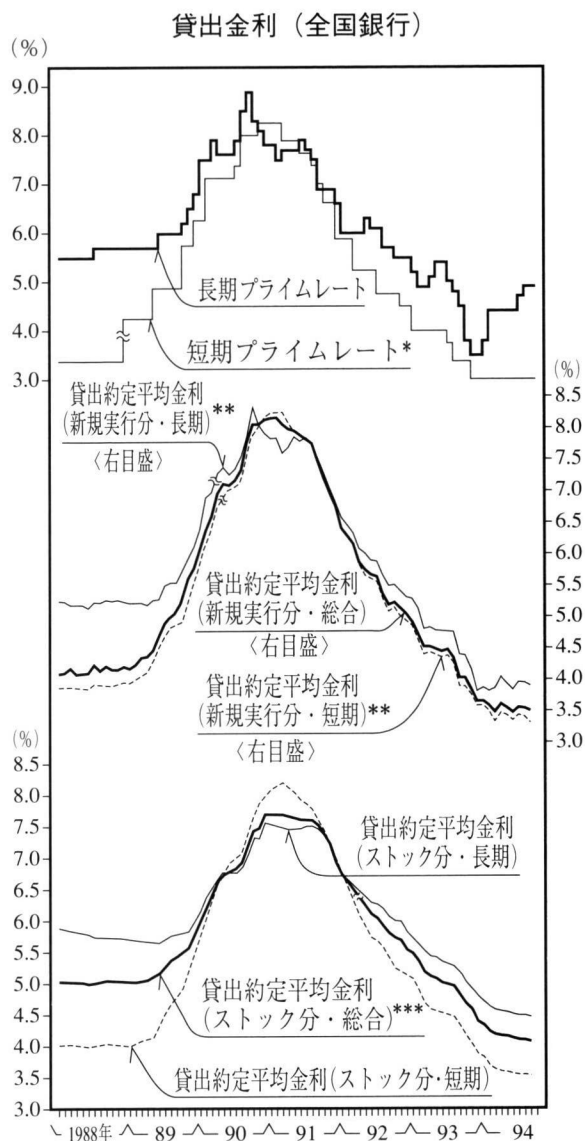
#### 7. 貸出・預金金利

9月中の貸出約定平均金利（全国銀行）をみると、新規実行分については、短期、長期

ともに2か月連続で低下となったことから（短期：前月比 $\Delta 0.105\%$ 、長期：同 $\Delta 0.054\%$ ）、総合でも2か月連続で低下した（同 $\Delta 0.079\%$ 、総合：8月3.545%→9月3.466%）。

また、ストック分については、短期、長期、当座貸越ともに引き続き低下傾向を持続し（短期：前月比 $\Delta 0.008\%$ 、長期：同 $\Delta 0.014\%$ 、当座貸越：同 $\Delta 0.025\%$ ）、総合では、15か月連続で既往ボトムを更新した（総合：8月4.093%→9月4.072%）。

この間、9月の定期預金金利（自由金利分、3か月以上6か月未満の全銀受入金利平均）は前月比上昇した（8月2.024%→9月2.076%）。



(注) \* 1989年1月以降は都市銀行の中で最も多くの銀行が採用した金利。

\*\* 1990年4月以降は地方銀行Ⅱを含む。

\*\*\* 1992年4月以降は当座貸越を含む。

(調査統計局)